本草つうしん

第 26 号　2009 年 12 月 15 日　発行:本草薬膳学院

〒101-0041　東京都千代田区神田須田町 1-18 共同ビル 8F　FAX：03-5294-0190　URL：http://www.honzou.jp　E-Mail:haiyang@honzou.jp

祝　ご卒業、中医薬膳師合格おめでとうございます

去る 2009 年 11 月 3 日（祝）本校にて 2009 年度本草薬膳学院卒業式及び中医薬膳師の資格授与式が卒業生 12 名の出席で行なわれました。本校顧問、鷲見美智子先生よりお祝辞を頂き、劉海洋学院長より卒業証書並びに中医薬膳師資格証が各自に授与されました。学院長の挨拶、加地喜代子講師の祝辞に続いて、卒業を代表して 10 生の小尾佳世さんより学院への感謝の言葉が述べられました。
全国各地からそれぞれの年齢の方々の第 10 期生並びに通信生名の卒業生のこれからの活躍が期待されます。

卒業生並びに中医薬膳師合格者

10 期生　田中真純　岩瀬早苗　小尾佳世　藤井真紀　及川野絵子　小川美穂子　杉山智香
福田陽子　藤田有美　浜野純子　八巻順子　三宅睦子　斉藤由佳子　湯上谷静代
通信生　鈴木（岩舘）日出子　石原洋子　三浦恵美子　鉤　寿子　以上 18 名（敬称略）

『お祝いの言葉』

講師　加地　喜代子

中医薬膳師コース第１０期生の皆様、並びに通信生の皆様、本日はご卒業おめでとうございます。本草薬膳学院での１年間の勉強は長かったでしょうか、短かったでしょうか。皆様は、年齢、職業、中医学を学んだ経験の有無、本校で学ぼうと思われたきっかけ等、それぞれ異なったお立場で、1 年前ここに集われたことと思います。しかし今、1年間を振り返り、皆様が同じように感じていらっしゃるのは中医学の奥の深さではないでしょうか。もしかすると入学時よりも、わかったことが増えた分、「自分は何がわからないか」がわかることで、わからないことも増えたかもしれません。そして、もっともっと学びたくなったのではないでしょうか。近年、中医学が多方面で注目されているのは周知の事実です。医学が加速度的に進歩し、遺伝子解析を始め新しい薬や機器等により、今まで治らなかった病気が治るようになり、数多くの病気の早期発見、早期治療が可能となりました。しかし、いくら医学が発達しても、大切なことは「病気にならない。なっても重症化させない。」ということです。これは中医学でいう未病医学に他なりません。ここ本草薬膳学院で学んだ皆様には、基本的な事がらの習得から始め、後々発展させられる本物の中医学の知識の扉を開けていただけたことと確信しています。

本日、皆様は中医薬膳学の専門家として素晴らしいスタートをきられました。どうぞ今後も興味のアンテナをピンと張り、それぞれのお立場で学ぶことを継続し、是非実生活で社会の役に立てて頂きたいと思います。

そして、辛かったり壁に突き当たったりした時は、本草薬膳学院はいつも卒業生の皆様の応援をしているという事を思い出して頂ければと思います。最後になりましたが、皆様のご健勝とますますのご活躍を祈念し、ご卒業の祝辞とさせて頂きます。

卒業生の言葉

卒業生代表中医薬膳師コース第10.期生　小尾　佳世

本日は、私たち中医薬膳師コース１０期生のために卒業式を開催いただき、ありがとうございます。

私たちは昨年秋から本草薬膳学院に通いはじめましたが、ふたたび今日のように一段と冷え込む晩秋の朝を迎え、ふりかえると1年、あっという間でした。長野から、福岡から、静岡からと遠方の参加者も多く、週末もシフト制で勤務することが多い２０歳代後半～３０歳代女性も多数のこのクラスは、毎月第３土日に全員が揃うわけではなく、でもいつも、来ていない誰かを気にかけたり、年明けには新年会と称して萬谷先生石田先生も巻き込むようにお声がけして飲む機会をつくったりと、ゆるやかな交流のなかで一年という時間を重ねてきました。思えば一番最初の授業で加地先生に「最初はチンプンカンプンでも、最後のほうにはなんとなーくわかるようになるから、心配しないで！」と明るく仰っていただきましたが、授業開始半年を過ぎてもピンとこないことも多く、「わかるようにならないよね…」と不安をささやき合ったこともありました。卒業間近になり補講を受けたり、グループで話し合ったり先生方に質問したり、ああでもないこうでもないと言い合う時間があってようやくその域に近づいてきたような気がしています。考えてみると私自身、２０代後半頃から出版社に勤務する忙しい日々のなかで慢性的に体調を崩し、鍼灸や漢方にずいぶん助けられたことが中医学に興味をもつきっかけになりました。自分の体に何が起こっているのか知りたいと思い、妊娠・出産を経て、これからどうやって仕事と体調のバランスをとっていこうかと悩んでいたときの鬱屈した気持ちが、まだ卒乳していない生後８か月の娘を夫に預け、思い切って中医学の世界をのぞいてみよう、勉強してみようという行動につながったのだと思います。後押しとなったのが、本草薬膳学院で勉強する先輩知人のひとことでした。「(薬膳は)中国の歴史と哲学の奥深さに、少々しり込みもしそうですが、なんといっても、新しい食と調理体験は感動ものです。」それはその通り、たしかに「感動もの」だったなと思います。中医学的身体観や世界観、漢字だらけ、音で聞いてもチンプンカンプンの基礎理論にめげそうになりつつも、身近な食材を中医学の知識でもって眺めたときの新鮮さ、塩や紹興酒によるシンプルな調理法を見直す驚きを、感動とともに味わった一年でもありました。とはいえ、肝心の中薬、弁証施膳のあり方、陰陽五行説とまだまだつかめていない世界は広く奥深く、そのことを肝に銘じて、これから薬膳を学ぶ人々の一席に加えていただけたらと思っています。

最後になりますが、劉先生をはじめ、平尾先生、諸先生方、そして直接ご指導下さった加地先生、萬谷先生、石田先生、本当にありがとうございました。先生方の励ましが大きな支えになりました。本日は最初の一区切りとして、本草薬膳学院のますますの発展を祈念いたしまして、卒業のお礼のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。